



協力隊就任から約半年 現在と今後について

佐藤 裕奈

(大潟村地域おこし協力隊)

1 大潟村との出会い

私が大潟村の地域おこし協力隊に就任したのは、今年(令和6年)の4月でしたが、大潟村へ訪れるようになったのは今から約8年前でした。

当時勤めていた職場のつながりで『大潟の自然を愛する会』の会長と知り合いました。それをきっかけに会の活動として、生き物の観察会や工作教室、野鳥の個体数調査などのために大潟村へ度々訪れることとなりました。

大潟村の魅力の一つは、希少な鳥類に好まれる環境であることです。ここでは冬になると希少なガン類や猛禽類が見られるようになります。見られるガン類はマガンやヒシクイの他に、絶滅危惧種のハクガン、シジュウカラガン。猛禽類は絶滅危惧種のチュウヒやオオワシ、オジロワシが飛来します。



(オジロワシ)

大潟村は干拓によりできた村であり、面積の多くを水田が占めています。稲刈り後の落ち穂を食べるガンたちにとっては、広大なエサ場が

広がっているように見える事でしょう。また、猛禽たちにも好まれる環境であり、圃場にはエサとなるネズミのような小動物がおり、かつライバルとなる狐のような哺乳類が少ないことが、希少な鳥類が生息する要因の一つと考えられるそうです。ガンたちが圃場でエサをついばむ様子を見ていると、大潟村の農業と野生生物が隣人のように親しい関係にあるように思えました。

野鳥の調査(主にガン類)に、県外または国外からも研究者が訪れます。私も、渡り鳥が飛来するシーズンに調査へ同行させていただきました。大潟村干拓博物館内には私が野鳥観察の際のマナーについて描いた漫画のチラシが置いてあり、それを見た研究者の方より漫画絵本作成の依頼をいただいて『ハクガンの復活物語』を描かせてもらう事となりました。



(ハクガンの復活物語 表紙、1ページ目)

大潟村が舞台となっている捕獲調査の場面もあり、現在は大潟村干拓博物館にも本を置いていただいています。

以上のことがあり、野鳥の調査や本の制作で思い入れのある大潟村で、もっとこの環境を身近に感じたいと思うようになりました。そんな時に地域おこし協力隊の募集を教えていただき応募させていただきました。

2 生態系公園の譲渡後に向けて

地域おこし協力隊としての担当業務は、生態系公園の活用および運営、拠点づくりに係る活動についてです。

生態系公園は令和7年度に秋田県より村へ譲渡される予定であり、今年の5月いっぱい鑑賞温室の通常営業が終了しました。幻想的なヒスイ色の花・ヒスイカズラが見どころの温室でしたが、村の管轄になるのは温室内の植物はすべて移動・撤去されてからになります。温室は現在立ち入ることができませんが、秋田県の実然環境を表現した野外公園は、村民にとって散歩や憩いの場所として親しまれています。生態系公園を今後どのように活用していくかは、私や役場だけではなく、村民と一緒に意見を出し合って決めていく事が大切だと思っております。そこで、村民の方々から意見を聞くためのワークショップを開催することにしました。

1回目のワークショップは、ふれあい健康館の利用者を対象としたものです。テーマは、『言うだけタダ！理想の生態系公園』。

利用者の方々とは一緒に体操をしたり農園を見せてもらったりと交流があり、皆さんとても親切で優しい人たちでした。このワークショップは村の方々の心から望む公園像を聞き出す事が目的でしたので、遠慮して本心からの意見が出せなくならないようにこのようなテーマ名に

してみました。模造紙に描いた木に、葉っぱ型の付箋にアイデアを描いて貼っていきます。皆さん思い思いに意見を出してくれて、模造紙の木の枝にはたくさんのアイデアの葉が生い茂りました。



『言うだけタダ!理想の生態系公園』
アイデアの木

その後、このワークショップのことを知った地元の議員の方にお声がけいただいて、再度ワークショップを開かせてもらったり、地元の学生が所属する環境保全に関するNPO団体からアイデアをもらったりと、地道に地域住民の声を集めています。高齢の方は気軽に集まれる憩いの場を、子育て世代は子供と楽しめる場所を望み、自然環境に対して関心の高い学生からは公園内の外来種の駆除についてアイデアを出してもらうなど、少しずつ求められる公園の姿が見えてきたように感じます。

3 地域と関わる

協力隊として移住後は、大潟村をよく知るために地域の農業の場やコミュニティに関わるように努めました。

まず、大潟村の主要産業である米作りの農家さんの種まきを手伝いました。大潟村は1農家あたりの田んぼの所有面積が広く、農繁期になると一度に必要な人手が一気に増えます。稲作

もその他の作物にも言えることですが、雨が降ればほとんどの作業ができませんし、場合によっては雨の後は作物が乾くまで仕事が進められない事もあります。作業を手伝っていて印象的だったことは、時間いっぱいできるだけ多く作業を進めようと、全体が連携して仕事を進めている事でした。一緒に作業をしていた農家さんは、稲作はチームプレイだと教えてくれました。

また、青年会の盆踊り大会の運営に関わらせてもらったり、地元のフラダンスの練習に参加させてもらったりと、地域の方々とできるだけ交流して、人を知ったり自分を知ってもらう事に努めました。大潟村の皆さんはとても親切な方が多く、秋田市から来た私を快く受け入れてくださいました。村の方と一緒に何かをする事はとても楽しく、今後もぜひ、一緒にイベントや企画ができればと思っています。

4 カタマルシェに関わらせてもらって

協力隊就任後まもなく、「カタマルシェ」の運営に携わることとなりました。

カタマルシェは同じく地域おこし協力隊の明平冬美さんが始めたマルシェであり、地球と人の未来を考え、やさしいモノづくりをする人を応援したいという思いからスタートしました。オーガニックや添加物を極力使用していないもの、グルテンフリーなものなど、安心安全な農産物や加工品を取り扱っています。

明平さんが現在は育休中のため、代わりに私がカタマルシェを運営することとなりました。イベントの運営についてはこれまで経験がありませんでしたが、役場の方々に教えていただいたり、明平さんと打合せをさせていただいたりして、どうにか3月のカタマルシェの日を迎えることができました。

当日は親子連れなど、約3,200名以上もの来

場者が生態系公園に訪れ、とても賑わいました。村内外の出店者の他、県立大学の学生による竿燈や龍勢会による太鼓などのパフォーマンスも充実しており、訪れた子供たちの楽しげな声が印象的でした。村外からも人を呼び込んで村を活気づけられるような企画ができる協力隊の先輩である明平さんに、自分もぜひ続いていきたいです。



(6月開催のカタマルシェの様子)

5 今後の活動について

秋田県から大潟村に譲渡される予定の生態系公園について、利活用案を考案していくつもりです。また、野外公園のみにとはなりますが、できる範囲で体験教室のようなイベントも開催していきたいと思います。イベントやワークショップを通して、村に求められる公園像を固めていければと考えています。

大潟村は秋田市から通っていた時から、希少な野鳥が訪れる地域だとは知っていました。実際に住んでみて、お店や住居などの生活に必要な施設が小さくまとまった便利なコンパクトシティであることや、おいしいお米や野菜、親切で温かい地元の方々など、村の魅力について新しい気付きを得られました。地元の団体や他の協力隊の方たちと一緒に、村の魅力を活かした事業を作っていきたいと思っています。